

所報

No.134
令和3年6月23日

富山県総合教育センター

富山市高田525

E-mail:center@tym.ed.jp(代表)
URL:http://center.tym.ed.jp/

目次

- 巻頭言 1
- 今年度の調査研究事業の概要・研修事業より
教育研修部 2
科学情報部 3
教育相談部 4
- 特別寄稿(笹田客員教授)・随想 5
- 連載「知って得03」 6

巻頭言

変化に対応し、未来を切り拓く力

所長 亀永 辰之



令和3年度がスタートしました。昨年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大により学校は長期の臨時休業となり、再開後もすべての教育活動で感染症対策を考慮した例年と異なる対応の連続でした。今年度に入ってもコロナ禍は収まらず、時々状況に応じた対策をとり、制約条件の下での最適解を模索しながら教育活動を行う毎日が続いています。

しかし、人間社会はこれまでも苦難の連続だったことを実感する話を、先日我が家のお手次のお寺さんから聞きました。寺には130年ほど前の明治時代にコレラの流行で一村だけでも30名以上が一時期に亡くなった記録があるということです。遠い外国の話ではなく身近なところで起きていたことです。また、河川の氾濫で寺や民家や田畑が流される甚大な被害の記録も残っているそうです。呆然となり立ち止まってしまうような困難にも立ち向かい、時代を切り拓いてきた先人の苦勞を知り感謝の念が込み上げてきました。そして今のコロナ禍も想定外のことでなく、立ち向かい乗り越える課題なのだと感じました。視野を広げれば、グローバル化、人口減少、

AI(人工知能)やロボットによる技術革新などによる急速な社会構造の変化もまた、我々は不安視せず、未来を切り拓くためにしっかりと向かい合う課題なのだと思います。

さて、令和2年度末には「富山県教育大綱」が改定されました。技術革新やグローバル化など激しい変化の中で、子供たちが主体的に課題に取り組むことができる資質や能力を育むことを目指し、これまでの大綱の「ふるさと富山に誇りと愛着を持ち、地域社会や全国、世界で活躍し、未来を切り拓く人材の育成ー真の人間力を育む教育の推進ー」の基本理念を継続しつつ、新たな教育課題を取り込み「課題解決型教育の展開」、「ICT教育の推進」、「地域社会と協働するチーム富山教育の実現」にも取り組むこととしています。

総合教育センターにおいても、新型コロナウイルス感染症の対策をとった上で、集合・対面型とオンライン・リモートを併用したハイブリッド化など研修の実施形態を工夫しながら内容の充実を図るとともに、1人1台端末など教育環境の変化や、新たな教育課題に対する研修ニーズにも臨機に対応し、真の人間力を育む教育の推進のため、教職員の資質向上のお手伝いをしていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

令和3年度初任者研修会・新規採用教員研修会より



4月15日
小・中・義務教育学校開講式



5月6日
栄養教諭「学校給食の栄養管理」



4月27日
幼稚園教諭・保育教諭「研修の振り返り」

研修顧問・学力向上アドバイザー・客員教授等の紹介

今年度は研修顧問と学力向上アドバイザーそれぞれ1名と、富山大学人間発達科学部から客員教授・准教授計4名が着任されました。

研修や調査研究事業等において助言をいただくことになっております。

山崎 弘一 研修顧問
笹田 茂樹 客員教授(代表、企画調整部)
成行 泰裕 客員教授(科学情報部)

吉倉 哲夫 学力向上アドバイザー
増田 美奈 客員准教授(教育研修部)
和田 充紀 客員教授(教育相談部)

調査研究の概要

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に関する調査研究（2年次）

— 深い学びにつながる授業づくり —

昨年度教育研修部では、「深い学びとは」の疑問から調査研究を始めました。新学習指導要領の理解を進め、コロナ禍でも授業を大切にしている協力校の姿から、「単元構想の工夫」「問いの工夫」「教科の『見方・考え方』の活用」が子供の深い学びにつながっていることが見えてきました。

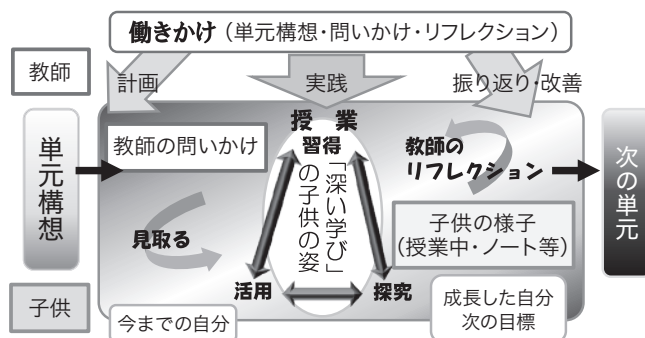
「単元構想」の大切さは、皆さん周知のことと思います。昨年度は「授業づくりシート」を作成し、授業者が、単元目標を明確にすること、子供の既有知識を生かすこと、単元で活用する教科の「見方・考え方」を整理すること等を意識できるようにしました。授業者自身がポイントを意識しながら授業をつくっていくことで、目指す子供の姿を明確にした授業実践が見られました。また、「深い学びカード」で深い学びの子供の姿を8つ掲げ、その姿を授業の中で見付けたことで、教師の働きかけとの関連も見えてきました。

今年度は、さらに充実した単元構想の基、授業の中での「問いかけ」に着目します。

- ① 子供が学習課題を常に意識できるような問いかけ
- ② 「見方・考え方」を意識するような問いかけ
- ③ 子供の思考の流れをみて、リフレクションを促すような問い返し

等、「問いかけ」の役割を再認識できるようにしたいと考えています。また、「習得・活用・探究」の学びの過程で見せる子供の学びの姿を捉え、深い学びを育む教師の働きかけと結び付けていきます。さらに今年度は、教師自身のリフレクションも研究の要素に加えます。授業者と共に、子供の姿からリフレクションすることで、授業者自身が授業改善の意欲を高め、次の授業に生かしていけるようにしたいと思います。

この調査研究を通して、現場の先生の日々の授業に寄り添い、子供たちの資質・能力を育む授業づくりの手助けになるよう、調査研究を進めていきます。



研修事業より

初任者研修会 「教員としての自覚と使命2」

4月22日に全校種を対象に行われました。

講義Ⅰでは、(株)よしともコミュニケーションズから講師を招き「コミュニケーション力を鍛えるための4つの鍵」をキーワードに、社会人としての身に付けておきたい基本スキルを中心とした講義がありました。講師の先生方の体験を交えた説得力ある話や演習により、受講者は意欲的に研修に参加し、すぐに実践に生かしていこうという意欲を高めていました。

講義Ⅱでは、個人情報情報を大量に扱う学校では教師自身が情報モラル意識を高める必要があることから「情報管理」「情報モラル」「マナー」の3つの観点からの講義がありました。また、実際にあった事例を基にした説明も多くありました。



講義Ⅰ マナーアップ

講義Ⅲでは、各校種ごとに「学級経営」や「学習指導」「校務処理」について研修し、指導助言をいただきました。

受講者からは「社会人としてのマナーを身に付け、子供たちや保護者、地域の人々から信頼される教師になりたい」「情報の取り扱いに十分注意したい」「授業では目標を明確に伝えられているか確認しながら授業を進めたい」などの声が聞かれました。



講義Ⅲ 校務処理

調査研究の概要

小学校における情報活用能力の育成に関する調査研究（2年次） — プログラミング教育を中心として —

学校の先生方からは、GIGAスクール構想による1人1台端末の導入に加え、情報活用能力の育成、プログラミング教育の実践等、情報教育に関わる取組が大きな課題になっているという声が聞かれます。そこで科学情報部では、昨年度より、小学校におけるプログラミング教育を中心とした情報活用能力の育成に関する調査研究を行ってきました。昨年度の成果としては次の3点が挙げられます。

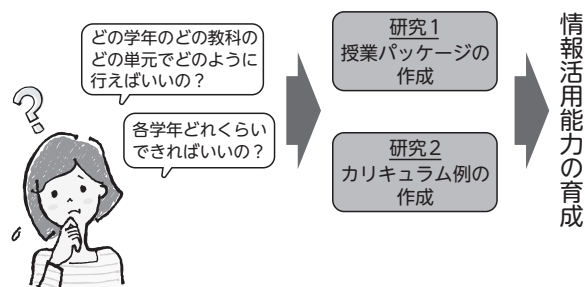
- ・プログラミング的思考の捉え方を具体化したこと
- ・授業実践のポイントを明らかにしたこと
- ・授業パッケージ（5年算数科「正多角形」、6年理科「電気の利用」）を作成したこと

授業パッケージには、指導案やワークシート、プログラミング教材、提示教材等がまとめられており、総合教育センターのホームページからダウンロードできるようになっています。是非、ご覧ください。

そして今年度は、昨年度の成果を基にしながら次の2つの研究に取り組んでいます。

- ・授業パッケージ（昨年度作成以外の単元、学年、教科）を作成する
- ・小学校6年間の情報活用能力育成に関わるカリキュラム例を作成する

これらの研究を通して、子供たちの情報活用能力の育成を図る各学校での実践の一助となれどと考えています。



研修事業より

理科教育講座（自然観察）

理科教育室では、自然観察に関する研修を市町センターと協業で行っており、フィールドワークを通して指導力を高めるよい機会になっています。

研修では身近な地域の土地や川の様子を観察や、身近に見られる植物・動物の観察、地層・岩石の観察等を行っています。

今年度は以下の日程になります。

入門コース半日

6月1日（火）高岡市教育センター
（終了しました）

9月28日（火）朝日町教育センター

入門コース1日

7月27日（火）砺波市教育センター

中級コース1日

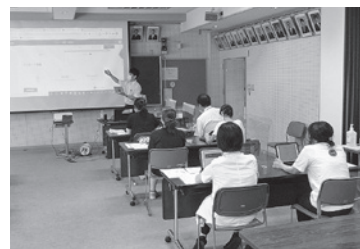
8月24日（火）上市町教育センター
（お問合せ：科学情報部 理科教育室 TEL076-444-6165）



地層の観察



水生生物の観察



教育用クラウドプラットフォームの使い方

情報教育訪問研修

情報教育室では、各学校における情報教育に関する指導力の向上を目指した訪問研修を行っています。

研修テーマの例としては、「授業におけるICT活用」「1人1台端末を使った授業」「教育用クラウドプラットフォームの活用」「小学校プログラミング教育」「情報モラル」「情報セキュリティ」等があります。具体的な研修内容は、事前に打合せを行うことで、各学校の実態やICT環境に応じたものにしています。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症の対策を取りながら31回実施し、延べ933名の先生方が受講されました。今年度は、1人1台端末の導入に合わせICT機器の効果的な利用についての内容をさらに充実させ、学校での実践を支援したいと考えています。申込みを希望される学校は、まず電話でご連絡ください。

（お問合せ：科学情報部 情報教育室 TEL076-444-6168）

※申込みは実施予定日の1か月前までをお願いします。

教育相談部

調査研究の概要

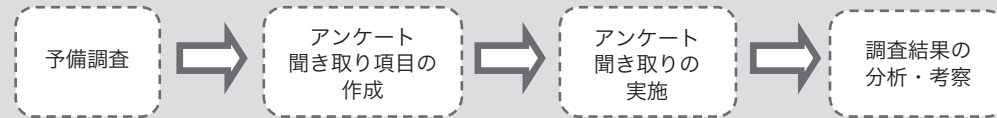
児童生徒の人間関係の課題に対応した育成プログラムに関する調査研究 — 教師は人間関係をどう捉えて何を課題としているか（1年次） — — 人間関係の課題に対応した育成プログラムの再編（2年次） —

教育相談部では、調査研究のテーマとして、心理教育の考え方を基に、学級等の集団単位で実施する発達促進的・開発的な学習プログラムの開発に取り組んできました。研究の成果を、児童生徒の心理的成長を促す「育成プログラム」として教育相談訪問研修のメニューに加え、学校現場への支援に提供してきました。一部のプログラムは開発から既に20年近くを経過し、学校を取り巻く環境や教育的な要請の変化により、学習プログラムや活用のための教員研修プログラムにおいて、実践上の課題に

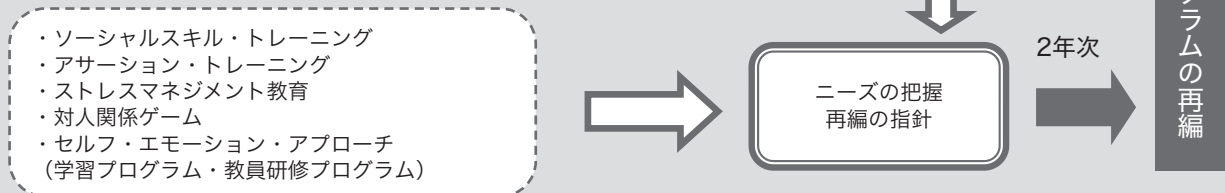
合わせた対応が必要になっていると考えています。そこで、改めて、学校現場のニーズを教師の人間関係の課題の捉え方から検証し、それを基に育成プログラムの更新と教育相談訪問研修の再編を行うこととしました。

1年次においては、教師が児童生徒の人間関係をどう捉えて何を課題としているかについて調査するとともに育成プログラムの課題を見出し、それを受けて2年次において育成プログラムの開発と効果検証を行います。

研究1 人間関係の課題の明確化による学校現場のニーズの検証



研究2 育成プログラムの実践上の課題の抽出と見直しの指針の検討

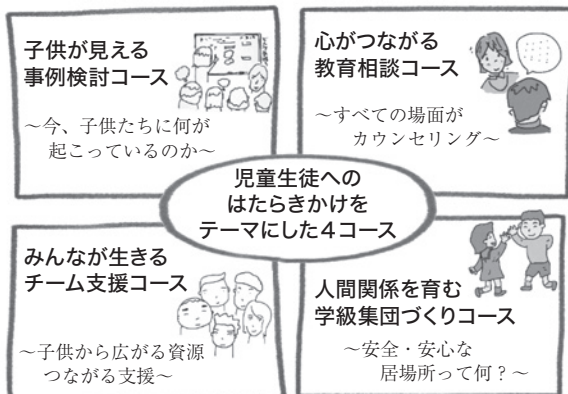


研修事業より

学校カウンセリング講座 —4 コースに改編—

学校カウンセリング講座は、先生が児童生徒と共に、それぞれの自己実現に向けてよりよく生きるためのはたらきかけについて考える研修です。

今年度、新しい4コースを実施します。先生と児童生徒との日常のコミュニケーションに生かす学校カウンセリングについて学んでいく研修となるようにしました。また、講座の改編に合わせて「学校カウンセリング講座テキスト」を全面改訂しました。先生方が子供とのかかわりの中で感じ、考える手がかりにしたいと思います。



令和3年度 特別支援教育の研修講座

ビジョントレーニングの専門家

「特別支援教育講座 ～読み書き支援コース～」

講 師：大阪医科薬科大学 LD センター
奥村 智人 氏

読み書きに困難を抱える子供たちの実態把握と学習支援について具体例を通して学びます。
※総合教育センターを会場に、講師の奥村先生とはオンラインでの開催となります。

8/24
Tue.

どの校種の先生方にも大好評!

「発達障害教育研修会 ～気になる子供の理解と対応～」

講 師：神戸大学大学院 鳥居 深雪 氏

午前は幼児期から学童期、午後は思春期を中心に、発達障害のある子供のライフステージに応じた支援の在り方や二次障害を起こさないための教育的支援等を学びます。子供たちと実際にかかわる「臨床」的な研究や活動を重視した内容の講義が期待できます。

8/25
Wed.

2019年末からはじまった新型コロナウイルスの流行によって、世界は大混乱に陥りました。日本でも2020年初めから様々な影響が出はじめ、東京オリンピックの延期、緊急事態宣言の発令など、国民生活のすべてにわたって大きな弊害がもたらされています。

ここ数十年経験したことのないパンデミックに、「何が正しいのか？」正解がわからないまま、各国政府が試行錯誤を繰り返しながら対策を模索しているのが、世界の現状だと考えます。

このコロナ禍によって、教育面では2019年度末に全国一斉休校の措置が取られ、子どもたちの学習の遅れが大きな問題となりました。この休校措置は、その対応方法によって地域間や学校間の格差を生んだだけでなく、子どもたちの置かれた家庭環境によって格差が広がるという深刻な事態を生み出しました。

また、子どもたちの登校が再開されると、教員が検温や消毒作業に追われたり、GIGAスクール構想の前倒し実施によって端末の調整や研修に忙殺されたりして、「働き方改革」に逆行するような事態も起こりました。

「ウィズコロナ」あるいは「ポストコロナ」の時代においては、教育界でも従来のやり方に囚われない、新たな手法や発想が必要となってきます。そのためには、これまで教育現場で横行していた「ビルド・アンド・ビルド」の考え方を捨て、「働き方改革」で認知されるようになった「スクラップ・アンド・ビルド」をいっそう推し進めなければなりません。

その際、「何が正しいのか？」正解がわからない混沌とした状態では、「公正さ」が最も重要となります。先に述べたように、このコロナ禍で教育格差が広がっていると言われていますが、苦境に立たされている経済的に恵まれない子どもたちに対しても、公正に教育の機会均等が実現するよう努めなければならぬことを、私たちは肝に銘じておかなければなりません。



随想

グッドルーザーの精神

科学情報部長 岩城 圭一

「負けました。」

少し前に藤井聡太(二冠)棋士の投了シーンがメディアで話題になった。勝利したときもそうだが、負けたときに深々と頭を下げる場面がとても印象的だった。棋士にとって自ら頭を下げることはごく当たり前のことだが、審判がいるわけでもなく、勝ち負けの判断は当事者しかできない、「潔さ」という考え。負けることは本当は悔しいはず。しかし将棋には対局後、感想戦といってその勝負を振り返る時間がある。なぜ負けたのか、その原因を突き詰め振り返る。そもそも目先の対局で勝ちたいのも当然だが、もとにあるのは将棋の力を極めたいという思い。5年後10年後、自分がどうなっているのか……。正しい礼儀作法で、敗戦をしっかりと受け入れることのできる人は、負けを乗り越え次へとつながっていく。そして、伸びる、強くなる、人間的にも成長する。

教育者として自分はどうかだったのか。部活動指導に没頭していた20代の頃、全国予選である北信越大会が福井市で開催されたことがあった。全国上位が期待できる生徒が膝の痛みを訴え、試合前日に会場近くの病院へ飛び込んだ。「痛み止めを」と薬をもつかむ思

いで院長にお願いしたが、診察を終えて一言、「君は、この子の人生に責任がとれるのか？一生面倒を見てやることができるのか？」。痛みは体の危険サインであるとは喝され、けんもほろろに病院から追い出されたのである。それこそ目先の「勝つこと」にこだわり、人間教育を考えていなかった自分の未熟さに本当に恥ずかしく情けない思いであった。

スポーツや音楽、芸術も含めその道を極めることは、まず、自分を大切に、己が己の大切さを本当に深く理解することからはじまる。自分だけのためであれば単に器の小さい人間であるが、自分を大切にすることで自己肯定感が磨かれ、他者をおもひやる心も自然に湧いてくる。「自他共栄」、「利自即利他」も仲間のためは自分のため、社会のためも自分のためという考え方だが、その考えにたどり着くかどうか。文武両道とよく言われるが、文武は別のものではなく、一方の頑張りとは一方の結果にもつながっているという「文武不岐」ではないだろうか。「名こそ惜しけれ」が培う心のもち方や日本人の多くがもっている良さを認識するなど、教育すべきことは今も昔も変わらず、普遍的なものであると改めて感じている。

宮沢賢治と地学の深い関わり

科学情報部 主任研究主事 堀井 良徳

星空をめぐる列車の旅を描いた『銀河鉄道の夜』や風の歌が印象的な『風の又三郎』、心に響く名言『雨ニモマケズ』など、宮沢賢治の作品は現在も多くの人に読み継がれ愛されています。

賢治は、北上川に沿って広く分布する青白い凝灰質泥岩層を、ドーバー海峡に面したイギリスの白亜の海岸に見立て、花巻周辺の川床をイギリス海岸と名付けて親しんでいました。賢治の作品『イギリス海岸』では、生徒たちとイギリス海岸の調査を行いながら、川床の泥岩ができた時代や泥岩の地層の分布、くるみの実はどのように化石になったかなど、地学的な話題が次から次へと語られます。さらに、地層の表面に見られた足跡の化石を調べ、どのようにできたかを解説するシーンは、まるで実際に賢治と一緒にフィールドワークに参加したかのような気持ちで読むことができます。

地学教師であった賢治は、生徒が地学を楽しく学べるように野外に出かけ、岩石や鉱物の観察、雨風のはたらき、天体観測など、様々な地学現象をたくさん体験させました。地学は、本来自然現象を自ら体験し、その中から学びを得る学習であると賢治から教えられます。

子供の頃、昆虫や植物や鉱物が大好きだった賢治は、化石採集の描写や鉱物名に関する言葉をたくさんの作品の中に散りばめています。賢治が生きた時代、東北地方は、地震や津波が集中したり、天候不順による凶作が起ったりと自然災害に翻弄されました。賢治は不作に苦しむ農民を助けるため、地質や肥料の研究にいそしみ、農民たちの相談にのっていたそうです。そうして得た地学の知識や厳しい自然に直面して感じた畏敬や素直なおどろきを賢治は多くの作品に織り込んでいます。

「文学を通して地学の面白さを知る」という視点で、宮沢賢治の作品を読んでみてはいかがでしょうか。

『やまなし』の一節

二、十二月
蟹の子供らはもうよほど大きくなり、底の景色も夏から秋の間にすっかり変りました。
白い柔かな円石もころがって来、小さな錐の形の水晶の粒や、金雲母のかけらもながれて来てとまりました。
そのつめた水の下まで、ラムネの瓶の月光がいっぱいに透っており天井では波が青じろい火を燃したり消したりしているよう、あたりはしんとして、ただいかに遠くからというように、その波の音がひびいて来るだけです。

教育相談 コラム

かんにん、おおきに

教育相談部 客員研究主事 舘野 智子

NHKの朝ドラ『おちょやん』について、知人に問われました。「かんにん、おおきに、だんない、せやなあとかの言葉は、カウンセリング的ではないか」と。ごもつとも。「ごめんなさい」「ありがとう」「大丈夫」「そやねえ」は、相手に気持ちよく話してもらうことを促しています。知人は毎朝、テレビを見ていて、これらの言葉が素敵で、妙に印象に残ったそうです。そう言われて番組を見てみると、関西弁の柔らかさと相まって、なるほど、ほっこりしてきました。

カウンセリングは、コミュニケーションだと思っています。自分と他者とのやり取りですから、当然、傷ついたり、傷つけたりすることが前提としてあります。価値観がぴったり一致する相手は一人としていないのですから、なるべく相手を傷つけないよう気を配ることは互いに了解されているでしょう。そのためには、自分が何に傷つきやすく、相手は何に傷つきやすいのか、対人関係での知識と記憶、概念などが役に立つことはあるかと思います。



人は、自分が理解できないことについては反射的に否定しがちです。私は、理解できないことにむしろ、興味がわく。未知の相手に出会った時、未知を知る悦びにあふれてもいるのに、最初から否定してはいもったいない。カウンセリングに向かう前には、そんな気持ちになっています。「なんや、なんや、どないしたん?」。そんな感じでしょうか。

コロナ禍で人と人のコミュニケーションの機会が減っていることが気がかりです。学校という場に、子供や先生が毎日集まって来て、言葉やふるまいだけでもコミュニケーションが起きます。自分の気持ちを受け止めてもらえる可能性が漂っている場所なのです。もしかしたら、知人も我慢続きの日常に参っていて、『おちょやん』の言葉掛けに癒されていたのでしょうか。一つの問いかけから、想像がいろいろ膨らみました。